11th UNHCR難民映画祭 REFUGEE FILM FESTIVAL

2016年9月・10月　仙台・札幌・東京・大阪にて開催

主催：国連難民高等弁務官（UNHCR）駐日事務所／国連UNHCR協会

第11回UNHCR難民映画祭の上映作品の中から4作品を選び、描かれている物語の背景をご紹介します。
映画祭の詳細は公式ウェブサイトをご覧ください → **unhcr.refugeefilm.org**

シリア

▲シリアからギリシャへと逃れてきた姉と弟

2011年に始まったシリア紛争は政治的解決の糸口が見えないまま、6年目に入りました。トルコ、ヨルダン、レバノン、イラクなどの周辺国へ逃れた難民は約480万人に達し、シリアの国内避難民は660万人に上ります（2016年7月時点）。過酷な避難生活に苦しみ、欧州での生活に希望を託して移動する難民も多くいます。日本は今後5年間で最大150人のシリア人留学生の受け入れを表明しています。

『シリア、愛の物語』

シリアの獄中で出会った2人の活動家アマルとラグダは、壁に開いた小さな穴から互いを励まし合っていた。やがて2人は恋に落ち、出所後には結婚、3人の子どもにも恵まれた。ショーン・マカリスター監督が2009年に彼らに出会ってから5年に渡って記録された家族の肖像から浮かび上がる難民の姿―。そこには紛争に翻弄された男女の愛、家族愛、そして祖国への愛を巡るドラマチックな物語が綴られていた。

監督：ショーン・マカリスター
イギリス / 2015年 / 80分 / ドキュメンタリー/言語：英語、ペルシャ語
協力：山形国際ドキュメンタリー映画祭

アフガニスタン

▲パキスタンで生活しているアフガン難民の家族

1979年のソ連軍の侵攻、タリバン政権の圧制などにより、これまでに600万人以上がアフガニスタンからパキスタンやイランへ難民となって逃れました。30年以上たった今もアフガニスタンは難民出身国の上位であり（シリアに次いで2番目）人道問題が長期化している国の1つです。アフガン難民の半数以上が子どもで、庇護国での生活、教育支援が不可欠です。

『ソニータ』

タリバンから逃れるためアフガニスタンから難民としてイランへ逃れた少女ソニータ。テヘランのシェルターで教育を受ける彼女の将来の夢はラップ・ミュージシャン。だが祖国に住む親は兄の結婚資金を得る為にと、彼女に政略結婚を命じる。そもそもイランでは女性がソロアーティストとして活躍する事も出来ない。それでも夢を捨てきれない彼女の運命を変える出来事が起きる。果たしてソニータは人生を変えるチャンスをものにする事ができるのか―。

（日本初上映）
監督：ロクサラ・ガエム・マガミ
イラン、ドイツ、スイス / 2015年 / 91分 / ドキュメンタリー/言語：英語、ペルシャ語/2017年日本公開予定
（配給ユナイテッドピープル）

イラク

▲ファルージャから避難するイラク人の家族

2003年のイラク戦争開戦から不安定な情勢が続いていましたが、2014年にISがイラク北部のファルージャを占拠したことにより、新たに300万人が家を追われました。イラク国内では組織的な性犯罪、暴力行為が続いており、国内のキャンプで生活する国内避難民も増加しています。支援を必要としている人々はイラクのクルディスタン地域、バグダッド、アンバール、キルクークなどに集中しています。

『イラク　チグリスに浮かぶ平和』

2003年4月、チグリス川周辺を連日襲ったあの激しい空爆の翌日、綿井監督はバクダッド市内の病院で多くの空爆犠牲者たちと出会った。その時に出会った一家を追い続けた綿井監督は、開戦からちょうど10年目に再会するはずだった。2013年3月、彼はこれまで出会ったイラク市民の写真を手にバグダッド市街を走り回っていた。開戦前夜、空爆、米軍による制圧と占領、宗派抗争、爆弾テロ―。様々な局面を取材し続けてきた綿井監督が、彼らの人生の「その後」を追い、戦乱の10年を描き出す。

監督：綿井健陽
日本 / 2014年 / 108 分 / ドキュメンタリー/言語：アラビア語、英語

コンゴ民主共和国

▲コンゴ民からウガンダへと避難した難民

1997年、ローラン・デジレ・カビラ氏が首都キンシャサを制圧して大統領となり、国名をザイールからコンゴ民主共和国へと改称しました。その後東部地域で反政府勢力が蜂起したのを機に、国際紛争に発展。1999年に停戦合意、2002年には和平合意が成立しているものの、不安定な情勢が続いています。さらに、東部地域は歴史的な部族対立、天然資源を巡る武装勢力の対立、周辺国の介入等によって難民、国内避難民が増え続けています。

『女を修理する男』

コンゴ民主共和国出身の婦人科医、人権活動家デニ・ムクウェゲの姿を追ったドキュメンタリー。ムクウェゲ医師は第二次コンゴ内戦以来続く戦禍の中でレイプ被害にあった数多くの女性を治療し、彼女たちの精神的なケアと啓発活動にも人生を投じた事が評価され2014年にサハロフ賞を受賞した。カメラはムクウェゲ医師と彼を支える人々、レイプ被害者の女性たち、そして戦乱の背景にある紛争鉱物の実態にも迫る。

監督：ティエリー・ミシェル
ベルギー / 2015年 / 113分 / ドキュメンタリー/言語：フランス語、英語、スワヒリ語、マシ語
協力：コンゴの性暴力と紛争を考える会

もっと知りたい！

At a Glance

あっと あ ぐらんす －知ることからはじめよう－

2016 Vol.2
2016年8月 発行号

UNHCR The UN Refugee Agency

世界の113人に1人が強制移動

UNHCRが毎年6月に発表しているグローバル・トレンズ（年間統計報告書）は各国政府、UNHCRのパートナー団体、UNHCRが把握しているデータを集計したものです。これによると、2015年末時点で家を追われた人の数は初めて6000万人を超え、6530万人になりました。
6530万人のうち先進諸国で庇護申請を行なったのは320万人、難民は2130万人（2014年から180万人増）、国内避難民は4080万人（2014年から260万人増）でした。世界の総人口73億4900万人に対して6530万人が家を追われたということは、113人に1人が移動を強いられた難民、国内避難民、庇護申請者であることを意味します。

難民出身国 -----トップ3
全難民の54％がシリア（490万人）、アフガニスタン（270万人）、ソマリア（110万人）の3ヶ国で占められている。

難民受け入れ国 -----トップ6
2014年に続き、トルコが最も多くの難民を受け入れている（250万人）。その後、パキスタン（160万人）、レバノン（110万人）、イラン（97万9400人）、エチオピア（73万6100人）、ヨルダン（66万4100人）と続く。

新たな避難民 -----1240万人
紛争や迫害によって、新たに1240万人が避難を余儀なくされた。国内避難民860万人、難民180万人、残りは庇護申請者である。

無国籍者 -----約1000万人
UNHCRは2015年末時点で少なくとも1000万人の無国籍者がいると推計している。ただ、各政府が集計しているデータとUNHCRに報告された無国籍者数は78ヶ国370万人となっている。

発展途上国で避難生活を送る難民 -----全体の86％
発展途上国で避難生活を送る難民は1390万人で、過去20年以上で最も多い数字となった。後発開発途上国は全体の約26％にあたる420万人の難民に庇護を提供している。

18歳未満の子ども -----51％
全難民のうち51％が18歳未満の子どもである。2009年の41％から増え続けている。

ウェブサイトはこちら▶
国連難民高等弁務官（UNHCR）駐日事務所
〒107-0062　東京都港区南青山 6-10-11 ウェスレーセンター
TEL:03-3499-2011　FAX:03-3499-2272
HP www.unhcr.or.jp
Facebook www.facebook.com/unhcrorjp
Twitter @UNHCR_Tokyo

©UNHCR/A. Sakkab

シリア紛争を逃れたソラフの夢

シリア出身のソラフ（9歳）は、家族と共にヨルダンのアズラック難民キャンプで避難生活を送っています。テコンドーが得意なソラフは、明るくて活発な女の子。そんな彼女の夢はアメリカに行くことです。「親戚の人がね、アメリカには大きなスーパーマーケットや立派な学校があって、普通の暮らしができるのよって教えてくれたの。学校で良い成績をとって、将来は医者になって大好きなお母さんの糖尿病を治してあげたい！」

©UNHCR/H. Pes

ティナルバルカの夢

マリから家族とともに逃れてきたティナルバルカ（16歳）は、モーリタニアのムベラ難民キャンプで生活しています。幸運にも難民キャンプに学校があるため、好きな勉強を続けることが出来ています。「いつか弁護士になることが夢です」ティナルバルカは学校で優等生に選ばれ、同年代の子どもたちの模範となっています。

モジタバ：夢は癌の治療法を見つけること

アフガニスタン出身のモジタバ。今は、オーストリアにあるウィーン医科大学で生物分子学を学んでいます。「少数民族のハザラである私たちは、タリバンの支配にいつも怯えていました。それはまるで、牢屋に入れられているようなものです。移動の自由はなく、遅かれ早かれ攻撃される運命にありました。欧州に行くことだけが、その生活から逃れる唯一の望みでした。欧州までの道のりは、決して楽ではありませんでした。一緒にいた兄はトルコからギリシャにボートで渡る際、溺れて命を落としました。唯一の救いは、オーストリアで僕のことを支えてくれる家族に出会えたことです。彼らの支援のおかげで、今大学で分子生物学を学んでいます」
オーストリアで難民認定を受けた後、モジタバはアフガニスタンに残してきた家族を呼び寄せましたが、もう一人の兄弟ムスタファは癌のため、12歳の若さで亡くなりました。大切な人たちを失った悲しみと、これまで支えてくれた人たちへの愛情が、モジタバの大きな原動力となっています。

©UNHCR/G. Welters

南スーダンから1人でエチオピアへ

リム・ボル（21歳）は、祖国南スーダンの内戦によって両親を失い、たった1人でエチオピアのガンベラ難民キャンプへ逃れました。今は、キャンプ内にある小学校で働いています。「難民として生きるのと、自分の祖国で生きるのとでは全然違います」リムの本当の夢は医師になること。しかし、キャンプ内で専門知識を得ることは叶いません。UNHCRはエチオピア政府による初等教育の提供を支援していますが、資金不足により4年間ある中等教育のうち1年間しか提供されていません。

©UNHCR/P. Wiggers

毎日、紛争によって多くの家族が家を追われています。
それはあなたや私と同じように、普通の生活を送っていた家族です。
難民は「希望」と「夢」以外、何も持って行くことが出来ません。
難民は保護され、安心して生活する権利を望んでいます。
私たちは、難民に寄り添うために立ち上がります。
（UNHCRは9月の国連総会に向けてキャンペーン「＃難民とともに」を行ない、世界各国から署名を集めました
http://www.unhcr.org/refugeeday/jp/）

イラクから米国へ：取り戻した平穏な生活と誇り

イラク北部出身のマジド（写真右）と子どもたち。マジドの家族は第三国定住の機会を得て、去年1月に米国シカゴへと渡りました。イラクにいた頃、マジドは難民支援をするNGOで仕事をしていました。しかし、治安が日に日に悪くなり、友人の多くがテロによって命を落とすのを目の当たりにして、イラクを離れる決意をしました。

© UNHCR/Maren Wickwire/Manifest Media

「イラクでは、外に出るだけで常にテロの危険と隣合わせでした。クルド人である私たちは、子どもにクルド系の名前をつけることも、自分の名前で家を持つこともできませんでした。でもここでは皆が同じ人間として、普通に接してくれる。だから、クルド人であることを誇りに思うことができます」

©UNHCR/J. Bävman

ソマリアからスウェーデンへ：歯科医として活躍するアマル

アマルは、1991年ソマリアからスウェーデンに逃れて来ました。今は、スウェーデンで生活している難民の歯科治療を行なっています。「スウェーデンのことを、多くの機会に恵まれた国だと言う人がいます。そういう人たちは新たな目標を見つけ、どんなに辛いことがあろうとも、夢に向かってひたすら努力しています。一方で、努力することを諦めてしまう人たちもいます」

アマルが働くオスロには多くのソマリア難民が住み、患者の大半を占めています。治療の合間に、同じような経験をして来た難民を励ますことによって、マアル自身も励まされていると言います。
「あなたには成し遂げる力があるということを、新たな場所で希望を見出せずにいる人々に伝えたいです」

アトマ：母を思い出す料理

スーダンの青ナイル州出身のアトマは村が爆撃され、5日間歩いて南スーダンへ逃れました。今は難民キャンプでスーダン料理のお店を開いています。
「ここへ来たばかりの頃は何をして働けばいいのかわからず、食糧配給を待つばかりでした。でもある時、自分の料理が喜ばれることに気がついたのです。料理をしていると、もう5年近く連絡がとれない母のことを思い出します。母は『私たちの土地を守りたい、すぐに後を追うから』と言ってスーダンに残りました。ただ、生きてさえいてくれたらと思います」

©UNHCR/E. Byun

©UNHCR/S. Arcos

カルメン：靴に託す思い

コロンビアのブエナベントゥーラ で生まれたカルメン（写真左）は、10年前に娘と一緒にエクアドルへ逃れました。「コロンビアでは日常的に暴力行為が繰り返され、兄弟が殺されました。エクアドルで有名な靴デザイナーのイレ・ミランダと出会い、サンダルの新ブランドを立ち上げました。世の中の女性が自分自身を愛し、可能性を信じることが、子どもたちの人生をも良くすることにつながると信じています」

©UNHCR/S. Arcos